

とき の す 時ノ寿の森通信

<http://outdoor.geocities.jp/tokinosunomori>

E-mail: tokinosunomori@yahoo.co.jp

<連絡先>掛川市中宿 1 1 3 (TEL・FAX 0537-23-0412) 「森の駅 時ノ寿」(TEL 0537-28-0082)

2014 新春号 NO. 3 1

2014. 1. 1 発行

NPO 法人 時ノ寿の森クラブ

<もくじ>

★ 年頭のあいさつ 2

★ 行事案内

3月8・9日「1泊研修会」～日本の森づくりの発祥地を訪ねる旅～

* 1月25日までに参加申込をお願いします！ 2

★ 時ノ寿ブログより

12月 5日「障害者の皆さんが元気に育樹」 4

12月14日「2013年納会」 4

12月16日「グローバル化の時代にローカル志向で挑戦」 5

12月18日「樹木葬を考える」 6

12月24日「2013年もあと一週間」 6

12月25日「ミニコミ誌『掛川10の流儀』に載る」 7

<年頭のあいさつ>

あけましておめでとうございます。

旧年中は、時ノ寿の森クラブの森林再生活動にご支援ご協力を賜りまして、誠にありがとうございました。国内外に目を向けますと、地球温暖化に伴う気候変動による自然災害の脅威は、拡大するばかりです。しかし、経済最優先のグローバルな動きは、文明の転換点に立つ私たちの本当にやるべきことが何であるかを翻弄させています。

今こそ、国土に豊かに蓄積されている森林が、未来にとってかけがえのない財産であるということを想い、その森林を持続的に守っていくことを可能にする「森林と共に暮らす・循環型社会」を構築する時ではないでしょうか。

時ノ寿の森クラブは、微力ではありますが、その実現をめざして自らがそれを体現し、その考え方と実践の方途を広く社会に発信していきます。森林保全を具体的な形で示すため、今まで7年間に実施してきた延べ7万3000本の広葉樹植樹活動を、また源流域の延べ210haの人工林間伐活動を、引き続き広げてまいります。

そして2014年は、社会の多種多様な分野において森林資源を生かしてもらう取り組みに努力いたします。その基盤づくりとして、まずは今春、NPO法人事務所兼森林に親しむビジターセンターを時ノ寿の森へオープンする予定です。



さらに、社会から一層の信頼が得られ、もっとももっと多くの個人・団体の皆様が、時ノ寿の森クラブの森林再生活動に物心両面からご参加をいただけ

るように、認定NPO法人の資格取得をはじめ組織体制の確立をしております。

本年も、どうぞよろしくお願い申し上げます。写真は、今春オープンを目指して建築中の事務所兼ビジターセンターです。

追伸、年末にミニコミ誌「掛川10の流儀VOL.2」が発行されました。こだわりの流儀を持つ掛川人の一人として、拙者を載せてくれました。年の初めにあたり、市内外の多くの人々に、時ノ寿の森クラブへのご理解を深めていただきたく、1冊同封いたしました。ご覧くだされば幸いです。

理事長 松浦成夫

3月8・9日「1泊研修会」 ～日本の森づくり発祥地を訪ねる旅～ 行程表

今年は、筑波山麓で第1回植樹が行われて80年を迎えます。

国土の7割を占める豊かな緑に恵まれ、物資も豊富で、海外からは、「水も空気もタダの国」と羨望される我が国ですが、かつて列島は禿げ山だらけでした。当時、異常気象による大冷害や飢饉、災害、世界的な金融恐慌による身売りや自殺の増加、はては暗殺などと、暗い世相の中で森林も人心も荒廃していたそうです。この昭和恐慌、昭和大飢饉は太平洋戦争の遠因になったとまで言われています。こうした時代を背景に、日本の再生、復興を願い、昭和9年（1934年）に国を上げた全国緑化の国民運動が茨城県の筑波山麓で始まったのです。

植樹運動は、全国植樹祭に引きつがれていますが、現在国内の森林は、行き届かない間伐やマツ枯れ、ナラ枯れなどで荒廃が指摘され、局地豪雨による土砂崩れや竜巻など異常気象による災害は深刻化し、リーマンショックに代表される金融不況や年間3万人近い自

殺者など、昭和初期とどこか似た状況とも思えます。

「ヤマが荒れると、人心も荒廃する」とは、古くから先人が伝えた言葉です。そこで、あらゆる生命の源泉である森林の大切さや、緑化に努めた先人の労苦、貢献を後世に伝えようと、来る3月8・9日、緑化の原点である筑波山で「全国森づくり発祥地を拓く道普請・80年記念フォーラム」が開催されます。

このたび、主催者の地球の緑を育てる会、国土緑化推進機構、東京農業大学、毎日新聞社から時ノ寿の森クラブに対し、共催者になってもらいたいとの要請がありました。先人が築いてくれた「空は青く水清き」豊かな環境を次世代に引き継ぐという、この事業の趣旨は、時ノ寿の森クラブの原点でもありますので、要請を応諾し参加することとしました。

ご多忙とは存じますが、時ノ寿の森クラブのさらなる発展のために、親睦旅行を兼ねて行きたいと思っておりますので、会員の皆様の大勢のご参加をお願いいたします。

1月25日までにクラブ事務局まで、電話・FAX・メールにて参加申込を
してください。

記

- 1 日時 平成26年3月8・9日（土・日） 雨天決行
- 2 行き先 筑波山（茨城県）
- 3 集合 掛川市役所玄関前（車は北側駐車場に停車。） 3月8日（土）午前6時
* 関東方面に在住の方で、ご参加いただける場合は、現地合流も可能ですので、事務局までご相談ください。
- 4 交通 28人乗りマイクロバス
- 5 参加費 宿泊・夕食懇親会代（1万円程度）
- 6 持ち物 1日目は道普請のボランティア（女性も安心の軽作業です。）に参加しますので、ヘルメット、軍手、作業可能な服装・靴でお願いします。宿泊はホテルですので、洗面用具はホテルにあります。着替えのみ持参ください。
2日目は、カジュアルな服装でフォーラムにご参加いただきます。
- 7 日程表 8日：掛川IC → 東名高速～常磐道 → 矢田部IC → 筑波山到着（昼食） →
6:00 11:00
道普請ボランティア作業 → つくば市内ホテル（宿泊）
12:00～16:00頃 17:00
9日：ホテル → 筑波神社 → 80年記念フォーラム → 観光・昼食
8:00 10:00～12:00
東名高速 → 掛川IC 20:00 着予定

* 観光昼食コースは検討中です。時間の都合によりますが、水戸方面または東京スカイツリーなどを予定しています。

<時ノ寿ブログより>

2013年12月5日(木)

障害者の皆さんが元気に育樹

掛川市に誕生した「希望の森」は、海岸防災林をはじめ学校、病院、福祉施設など7か所に延べ62300本が植樹されています。昨年6月に始まった植樹活動で、今年10月に最終の植樹が完了しました。

この希望の森を、雑草の勢力に負けないように、年間2回程度は草取りをしてやる必要があります。その草取りに、市内の障害者施設に通ってる利用者のみなさんが、就労として参加をしてくれています。これは、わがNPOの呼びかけに市内の施設が応えてくれて実現しました。そして、障害者が就労として参加するためには、もう一つ大事な課題があります。それは、障害者の工賃をどこが負担するかです。わがNPOも、無報酬で運営している状況で、とても工賃の負担はできません。そのような中で、「いのちの森づくり」で連携をしている神奈川県平塚市の社会福祉法人進和学園・株式会社研進のご理解により、当面は障害者の草取りに要す工賃を負担していただけることになり、実現ができました。障害者の皆さんが、元気に働いている光景は、希望の森にピッタリです。来年も、ぜひ続けていきたいと思っておりますので、もう少しの間、進和学園さんからのご支援をよろしく願いいたします。

そんな素晴らしい様子を、新聞各社が報道してくれました。



2013年12月14日(土)

2013年納会

時ノ寿の森クラブの納会を14日開催しました。7年前に始まった未来の子供たちのためにふるさとの荒廃森林を再生し、豊かな本来の姿で引き継ぐ運動も、会員をはじめ多くの団体や個人の方々のご支援をいただき、本年も大きな成果を残し、納会を開催できることは主宰者として最高の喜びです。お蔭様で、NPO法人としても130名を超える会員を維持して来春には満4年となります。林業が衰退する中で、素人集団による森林再生活動は言葉で言うほど容易いことではありませんので、なおさら感無量であります。こうした成果を素直に喜び、かつ誇りに思いつつも、2年後、3年後の目指す姿を明確に持ち、その実現のための課題を洗い出し、解決に向けた計画的な行動がと



でも重要であることを、痛感しています。

そのような実感から、今年の納会では、第一部で「時ノ寿の森クラブのビジョンを語る」と題した座談会を持ちました。理事長からクラブの理念やビジョンを説明したあと、講師のお二方より講話をいただきました。ふじのくに西部NPO活動センター長川端務夢氏からは、ビジョンを実現するために認定NPO法人を目指しなさいという組織づくりの話を、もう一人のブランディングデザイン専門家の株式会社ブルックスタジオ社長藤田寿浩氏からは、時ノ寿プロモーションの話をしていただきました。

第二部では、第一部のNPOのビジョン実現のための具体的な方向性や事業内容についての話題を肴に、ほろ酔い談義が時間を忘れて行われていました。素晴らしい納会になりましたこと、講師のお二方、そしてオブザーバーとしてご参加して下さった掛川市役所生涯学習協働推進課・梅田さんに感謝いたします。今後とも、NPO法人時ノ寿の森クラブにご指導ご鞭撻をよろしく願いいたします。

2013年12月16日(月)

グローバル化の時代にローカル志向で挑戦

一昨日の納会では、時ノ寿の森クラブの将来に広がる可能性について、大いに話が盛り上がりましたが、現実の地方自治体は、今後の人口減少時代の中で、地方都市が生き残っていくためには優良企業の誘致しかないと、躍起です。たしかに、この1年間でアベノミクスによって日本経済は久しぶりに活気を取り戻し、上期決算では大手企業の史上最高益などというニュースがあちこちで聞かれました。しかし、新年度における地方経済の見通しは、税収は横ばいで、雇用も新規採用の動きはほとんどないという状況です。このような実情の中で、自治体の経営戦略が、より優良な企業を他都市から移転させて来ることに奔走するのも分らないでもありません。しかし、リーマンショックのときのように世界の金融恐慌が、日本の小さな地方都市の存亡まで左右しかねないような経済構造に頼るしか生きる道がないのだろうか。それには、私は大いに疑問があります。地方都市の豊かな有形無形の資源に、もっと着目するべきだと思います。



奇しくも、納会の翌日の新聞で、元岩手県知事で元総務相であった増田寛也氏が、毎日新聞の論説「時代の風」の中で、次のように書かれていました。「急激な人口減少により多くの地方都市は、将来消滅の可能性を内在している。(中略)最近まで世界第2位の経済大国であった日本は、生活が豊かになり欲しい物は簡単に手に入れることができるようになったが、一方で経済的な利益ばかりを偏重し、それを貨幣に置き換えて価値を問い、効率性のみを追求して物事が本来持つ多様な側面を見逃してきたように思う。グローバルズムによってさらに経済効率性の側面が強調されそうな今こそ、地域の個性に着目し、モノサシや尺度を変えて新たな価値観のもと、地方の将来の姿を描くべきであろう。たとえば、森林資源を利用した再生可能エネルギー源として木質バイオマスに着目するなど、モノサシを変えれば日本の各地に大いなる資産は数多く残っている。(以

下略)」と。

このように、時ノ寿の森クラブの将来ビジョンを後押ししてくれるような論説が、納会の翌日の新聞紙上に掲載されたというのも……。何か、勇気と自信が湧いてきました。

2013年12月18日(水)

樹木葬を考える

2025年問題とは、高齢社会が進展する中で、団塊世代の大量人口が後期高齢を迎えるのです。認知症疾患も大量に発生する見通しですが、死亡の数も同様に大量に発生する時代に突入するのです。ゆりかごから墓場までと言われる行政運営においては、それに対応するためのあらゆる分野の公共施設の拡張が大きな課題です。



かつてより、山村の資源を生かす方策の一つとして、里地里山に「樹木葬」という自然と一体の墓地を造成して、大都市の墓地問題解決策と地球温暖化対策をセットに推進していく構想を描いてきましたが、いよいよ本気に考える時が来たと思います。今年6月、全国唯一のモデルと言える岩手県一関市の「樹木葬」を見てきました。そして、そのときに感じたことを6月18日のブログに書きましたので、ぜひ読んでみていただきたい。

人間の死をテーマにした事業は、適当でないと言われる方がいるかもしれませんが、未曾有の少子高齢社会、価値観の多様化、大地震被害想定、地球温暖化など、多くの課題や事情を考慮すると、現代社会がまさに考えなくてはならない喫緊のテーマであると思います。いのちの源と言われる「森林」と「人間のエンディング」をセットに考えることは、当を得ているように思います。人間が人間らしく生き、エンディングもいのちの源に還るといふ「樹木葬」は、人々から共感されると思いますが、違うのでしょうか。

写真は、6月8日に訪ねた一関市の樹木葬の風景です。15年前には荒廃していた里山が、見事に再生し、土地本来の草木が豊かに植生し、明るく保全された里山は見事でした。この樹木葬の真摯な考え方で、明るく保全された自然と一体の墓地は、大都市の人々を共感させ、すでに2000件がこの樹木葬墓地に登録をされているそうです。

2013年12月24日(火)

2013年もあと一週間

公私にわたり、記憶に残る1年でした。公務員生活42年間のラストステージの1年でしたが、その間通算10年も携わってきた掛川市立総合病院事業を無事に閉院させ、新病院にバトンを渡すことができました。そして、社会貢献活動では、掛川市との協働による「いのちを守る・希望の森づくりプロジェクト」を成功させ、その活動母体であるNPO



法人の自立に向けた検討をスタートさせることができ、さらにはNPO法人事務所の建築工事も開始することができました。

私事でも、娘が第二子男児を無事に出産し、孫が4人となり、9月には4家族12名が揃って箱根旅行を楽しませてもらいました。しかし、妻の父87歳が10月に脳出血で入院し、以降介護生活が始まりました。

社会では、今年も国内外において地球温暖化による異常気象の脅威が凄まじさを増しています。そして、東京電力福島第一原子力発電所事故による放射能の処理が遅々と進まない中で、エネルギー政策は原子力発電に傾こうとしており、それに拍車をかけるようにリニア新幹線事業がスタートしました。

文明の発達は否定しませんが、地球温暖化が致命的な状況にある中で、この小さな国土の中で、さらにスピードや効率を求め、その代償として緑豊かな森林や生物多様な自然を壊そうとする政策には、強い疑問が湧いています。今夜の民放TV番組では、小泉元首相の脱原発産業への本気の確認をドキュメントしていました。なぜ国あげて脱原発のエネルギー政策に向いていかないのか？原発民間企業の本音を紹介する今夜のTVで、その理由がよくわかりました。私たち国民がしっかりしなければいけないのです。

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催のときには、世界の人々から日本のエネルギー政策を評価されるようになってもらいたい。それが今年の総括です。

2013年12月25日(水)

ミニコミ誌「掛川10の流儀」に載る

このほど掛川商工会議所・交流人口拡大推進委員会が「掛川10の流儀VOL.2」を発行されました。これは、同委員会が掛川市の商工業・観光業の振興による交流人口の拡大をめざし、掛川地域における商品・サービス・人材・技術・作法など、地域固有の資源や自慢できる素材(モノ・コト)を、多くの市民や訪れる人々に対して情報発信するために発行している雑誌です。



表紙には、「地域ブランドという概念は、商標やイメージの枠にとどまってはならない。掛川は、地域固有の生活様式や商いのやり方と捉えた。10種のカテゴリーから、10人の掛川人が、10通りの流儀で語る。」と書かれています。僭越ではありますが、そんなこだわりの流儀を持っている掛川人の一人として、拙者を今号に載せていただきました。

掛川市が、内外に誇る立派な方々が、長く続けてこられている立派な流儀ばかりで恥ずかしい限りですが、大変に光栄なことです。市内外の多くの人々が、掛川市の誇る「森林資源」について想いを新たにさせていただくために、素晴らしい情報提供をしていただきました。取り上げていただきました掛川商工会議所・交流人口拡大推進委員会に感謝を申し上げます。

年末年始は、家族をはじめ親戚や知人・友人などとの交流を楽しまれることと思います。ぜひ、この雑誌をお手元にお取り寄せいただき、多くの方々に配布いただければ幸いです。同雑誌は、JR掛川駅南口コンコース内の掛川観光協会ビジターセンターに置かれています。